

日本大学理工学部 学生会員 渡辺 章

日本大学理工学部 学生会員 新谷洋二

日本大学理工学部 学生会員 吉田 充

1. 研究の目的

岩槻市は、埼玉県東部に位置する、南北に細長い、面積49.16km²、人口約11万人の都市である。東京から30km、電車で大宮を経由して約1時間のところにあるベッドタウンであり、また「人形のまち」として全国的に有名である。

岩槻市は、城下町をルーツとして発展してきた「城下町都市」の一つである。本研究では、主に岩槻城廃城以降の街の変化について認識し、変化した要因を考察することを目的とする。

2. 研究の方法

- 1) 都市史、都市交通史等の文献を用いて、近世、近代の歴史的背景を把握する。
- 2) 歴史的背景を考慮しながら、絵図面、近代地図、都市計画図等で街の変化を検証する。
- 3) 文献、市役所訪問、現地踏査により、岩槻市で現在進行中の事業を調査する。
- 4) 上記の事項を踏まえ、街が変化した要因、また現在、そして今後の岩槻について考察する。

3. 研究結果

(1) 江戸時代の岩槻 (図1)

岩槻城の城郭は、本丸、二の丸、三の丸、新曲輪、新正寺曲輪からなり、それぞれの曲輪の間は自然の地形から生まれた堀があった。

三の丸の南西に武家屋敷群が、さらにその西に、日光御成街道に沿って城下町が形成されていた。城下町は9つの町から形成されており、中でも一と六の付く日に市が開かれていた市宿と、本陣、脇本陣が置かれていた久保宿が中心の町であった。

城郭、武家屋敷、城下町は、大構と呼ばれる土塁で囲まれていた。町を出入りする人は、大構の数カ所に設けられた木戸門を通して行き来していた。

また、現在街にある寺社のほとんどが、このころから存在していることが確認できた。

キーワード：岩槻、城下町都市、土木史

連絡先：〒101-8308 東京都千代田区神田駿河台 1-8

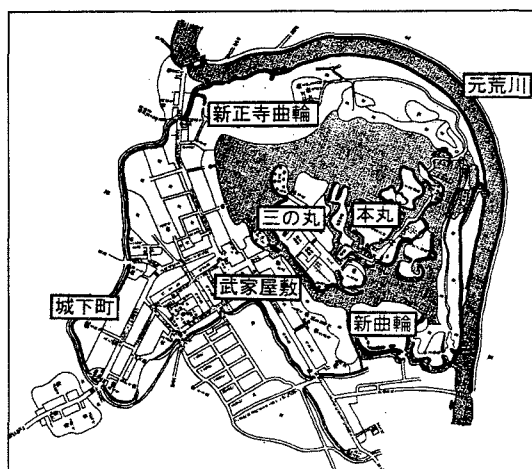


図1 岩槻城絵図(岩槻市史より、さらに加筆)

(2) 廃城時点から戦前にかけての岩槻

明治4年(1871)廃藩置県が行われ、岩槻藩は岩槻県になり、岩槻城は廃城となった。さらに岩槻県は、浦和県、忍県と統合され埼玉県となった。岩槻におかれる予定もあった県庁舎は、諸藩の事情により、浦和に置かれた。岩槻城の建物は売却され、明治21年(1888)には、本丸、二の丸、三の丸を貫くように道路が新設された。(図2)

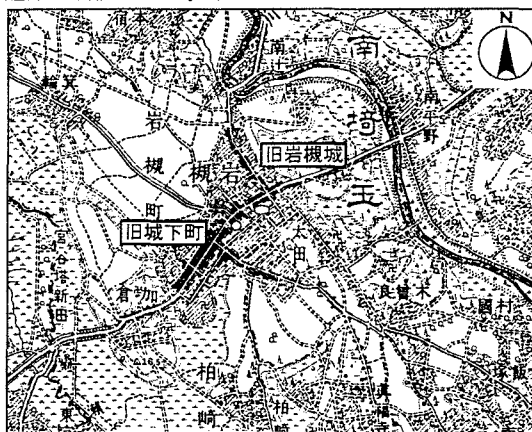


図2 明治43年の岩槻中心部

(大日本帝国陸地測量部 1:50,000 地形図「大宮」に加筆)

大正8年(1924)に武州鉄道が岩槻～蓮田間で開業したが、昭和4年(1929)に総武鉄道が開通したことで旅客が減少し、昭和13年(1938)廃止となった。総武鉄道は昭和19年(1944)東武鉄道と合併している。

(3) 戦後の岩槻 (図3)

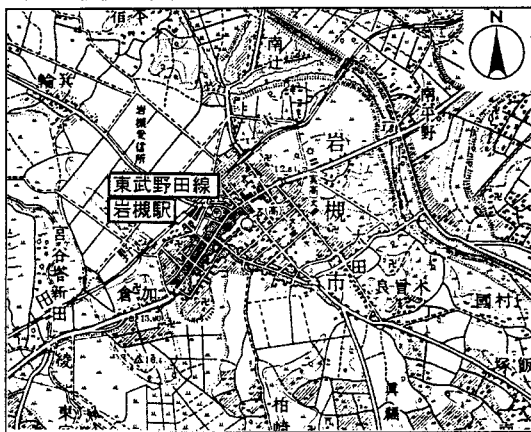


図3 昭和36年(上)、平成8年(下)の岩槻中心部
(国土地理院1:50,000地形図「大宮」に加筆)

昭和29年(1954)、岩槻町ほか6つの村が合併し、さらに市制を施行して岩槻市となった。

昭和30年代後半から旧城下町の南側や北側で宅地化が進んだ。旧岩槻城の南側の部分、新曲輪と呼ばれていたところは、岩槻公園として整備された。

昭和40年代になると、東岩槻地区で住宅団地や工業団地が造成され、駅も開設された。国道16号線と122号線のバイパス、東北自動車道といった、現在の主要道路交通網のほとんどが開通した。

岩槻駅東口駅前には、昭和50年代に再開発事業が計画され、平成7年度に完成した。岩槻市の人口は昭和60年(1985)に10万人を突破した。

(4) 今後の岩槻

岩槻駅東口駅前に続き、今度は岩槻駅西口の開設、それに伴う、西口駅前通り線等の都市計画道路整備や土地区画整理事業が行われている。

岩槻駅西口地区以外においても都市計画道路の整備や土地区画整理事業が行われている。中でも旧城下町の市宿を通る都市計画道路中央通り線では、景観に配慮した道路拡幅事業が行われようとしている。

市の南部は、平成13年春に開業予定の埼玉高速鉄道浦和大門(仮称)駅の駅勢圏に入ることから、一部地域を市街化地域に組み込もうとしている。また、市内では埼玉高速鉄道の岩槻誘致運動が活発である。

4. 考察

旧城下町地区は、道路は江戸時代からの線形を保ち、寺社もそのままの位置で残っているところが多く、大規模な開発は行われていない。旧城下町以外の地域においては、東武野田線沿いに宅地化が進んだ。積極的に宅地開発が行われた地域は、江戸、明治、大正と、水田、もしくは畑だったところ、あるいは明治期に売却された旧岩槻城の地域であり、古くから街が形成されて、寺社も多い城下町地区より開発が容易であったということだろう。

旧城下町地区は、道路の拡幅や建物の老朽化で建築物が変わり、実際に歩いてみると、古くから残っている建物と近代的な建物とが混在しており、日光御成街道沿いの城下町といった歴史的要素がうまく生かされていないように思う。この地区の町並みは、とりあえず、景観を考慮しようとしている中央通り線拡幅事業の成否にかかっているだろう。

しばらくは岩槻駅西口地区と南部地区以外に、大きな変化はないと思われる。もし変化があるとするならば、埼玉高速鉄道の岩槻延伸が叶ったときであろう。そうなった際に、旧城下町地域において、歴史的要素が、開発の中でどのような位置づけになるかが問題となるであろう。古くから残っている建物は数少なく、さらにその中で保存に適していると思われるものはわずかである。よって全てを城下町風の街並みに戻すことは困難であるが、そのわずかなものがうまく生かされる整備の仕方を期待したい。

◆参考文献◆

岩槻市『岩槻市史 通史編』岩槻市役所市史編纂室 1985年

菊池 丕他『岩槻 城と町まちの歴史』聚海書林 1987年